

雲南モンゴル族の村・興蒙雑考

成瀬哲生

山梨大学教育学部

雲南のモンゴル族の村である興蒙の共同体構造に関する雑考である。現地調査で抱いた疑問の中で、こちらの全般的な知識不足もあって、現地で解決することができなかった、魯班会に於ける旃班の問題、鳳山の廟内に展示されていた碑文に見える土の問題、山中の墓碑に窺える祖先崇拜の問題を手がかりに考えてみた。興蒙の多くの人々が携わる建築業が神話的に民族化されていることが、最も注意される。

1 はじめに：旃班

1994年8月14日から20日までの一週間、雲南省通海県河西地区の興蒙に滞在し、13世紀に南下してきたモンゴル族の子孫たちの現況を調査した。興蒙は、小高い急斜面の鳳山の南麓に川に挟まれて東西に細長くのびた四村と、川向こうの一村から成る。四村は、西から中村、白閣村、下村、交椅湾村である。川向こうの一村は、桃家嘴村。もともとは上村、中村、下村の三村から始まり、上村の地は漢族の村になったため、分離してしまい、中村と下村の間に白閣村ができた。更に新しく交椅湾村と桃家嘴村ができた。交椅湾村と桃家嘴村は、それぞれ村の形が肘掛け椅子と桃に似ているからだそうである。白閣村については、その名の由来を知る人に会うことができなかった。ただ村の中を歩いていると、白閣村が北閣村と表記されている場合もあった。二つの表記が混在していたので、思わぬことに、雲南の少数民族である白族を何故べ一族と発音するのかわかった。雲南方言なのである。baiとbeiの区別が無いのである。白閣村がもともとは北閣村であるとすれば、恐らく村名の由来は、村の北側の鳳山中腹の廟に関係するのであろう。鳳山中腹の廟については後述するが、位置的には、白閣村は、北に廟閣がある村である。北閣村が本来の表記のように思われる。

元朝滅亡後、支配者としての地位を失った彼らは、生業のため漁民となった。かつての杞麓湖は、興蒙にまで広がっていた。生活は、漁業だけで成

り立たず、男たちは出稼ぎのチームを組み、主に運輸業・建築業に従事した。漁業、運輸業、建築業、どこか遊牧民の面影を残す選択である。現在の興蒙は、「建築の郷」の異名があるほどで、建築業において最も成功を収め、大半の家が建築業に関係している。漢族の伝承によれば、建築の職業神は、魯班²⁻⁴⁾である。興蒙のモンゴル族は、この伝承を取り入れ、彼らの祖先である旃班が魯班から建築技術を習ったのだとしている。農曆4月2日の魯班会⁵⁻⁷⁾は、興蒙あげての祭りである。御輿に担がれた魯班像が村の中を練り歩く。魯班の弟子が師匠に感謝するため集まる日であるから、各地の建築現場に出稼ぎ中の男たちも必ず帰らなければならないとされている。職業神の祭日は、一般にその神の誕生日とされている日である。魯班の誕生日は、各地によって異説が多いが、農曆4月2日というのは見あたらない。なぜ興蒙では農曆4月2日なのか、やはり理由はあった。旃班が魯班から建築の書である『木経』を授けられた日とされているのである。そして、この伝説が生成された実際的な理由は、この時期から農繁期に入ることであろう。しばらく男手が必要な時期なのである。民族意識を紐帯とした地縁共同体（以下共同体と略称）の維持を図る、彼らの祖先の知恵であろう。知恵は、旃班の存在についてもいえる。

旃班の旃は、彼らの祖先の名に遡る。彼らが祖先と見なしているのは、元の至元二十年（1283）に臨安広西元江等処宣慰司都元帥として赴任して

きた阿剌帖木耳蒙古右旃である。二世が旃を姓とし、旃檀と名乗った。字は、南谷。文学を嗜み、元詩第一の大家として知られる虞集や掲傒斯とも付き合いがあったという。旃檀は、元朝に殉じたが、現在に多く残る旃姓は、その子孫だとされる。二世ではあるけれども、旃檀こそが雲南のモンゴル族共同体の運命的な始まりを象徴する名なのである。旃檀は、それゆえ興蒙の人々にとって特別の響きを持つ。雲南のモンゴル族に建築技術をもたらした旃班(zhanban)が旃檀(zhantan)を連想させる音であることは、軽視できない。遠く各地の建築現場に出かけていても、建築業という仕事そのものが彼らの祖先に深く結びついているのである。共同体を維持するために、出稼ぎ者の故郷喪失のリスクを巧みに避ける仕組みといえよう。

現在でも旃姓が多いのであるから、雲南のモンゴル族に建築技術をもたらした人物が旃姓であった可能性は、十分に考えられる。しかし、その名が班であった可能性は、どうであろうか。無いとはいえないが、そうであった可能性は少ない。というのも魯班伝説に既に旃班が生み出される契機になったのではないと思われる人物名が存在するからである。魯班の兄弟子とも、また魯班と一体とされたりもする張班である。『西遊記』第四回の終末部にも魯班二班としてその名が言及されている。張班(zhangban)、旃班(zhanban)、旃檀(zhantan)は、建築業に携わり始めた雲南のモンゴル族にとって啓示のように響いたのではあるまいか。彼らが建築業に特化していったのは、何も経済的利益の面からのみではなく、文化的心性の面からの動機づけもあったように思われる。彼らの中には、旃班を魯班の弟子とせず、魯班は旃班その人であると伝える人もいるのである。この伝承は、魯班と一体とされたりもする張班が旃班の起源であることを、逆に窺わせる。魯班が旃班であるとすれば、農曆4月2日の魯班会の説明はできなくなり、共同体の全体構造には不都合なのである。にもかかわらず魯班は旃班その人であると伝える人もいるのは、もともとの魯班伝説において魯班と一体とされたりもする張班が旃班の起源であることと無関係ではあるまい。

2 下村「以垂永久」碑

興蒙の歴史を知る上での、数少ない貴重な文字資料が鳳山中腹の三聖廟に陳列された古碑である。三聖廟は、元は関公廟で、現在は、チンギスハン・オゴタイハン・フビライハンの三像が祭られている。廟内の古碑は、『雲南省蒙古族歴史簡述(初稿)』¹⁾にも簡体字で活字化されているが、やや読みに戸惑う点もある。簡体字は、たとえば髪も発も同じ字体となるので、一字一字の比重の大きい文語を簡体字にすると、困る場合が多い。幸い我々も写真撮影してきたので、照合しながら、訓読を試みた。ここでは、信仰文化に関係する下村の「以垂永久(以て永久に垂る)」の碑を紹介し、清朝後期の彼らの共同体におけるリーダーの役割を考えてみたい。

下村「以垂永久」碑(原文)

蓋聞本村原籍蒙古、自元時隨旃元帥任任滇南、鎮守曲陀関、流落河西東門外土住。為本村寒苦、無方供培子弟讀書、於嘉慶十八年報海淤田壹佰伍拾畝、將來成熟田畝設立義學、并作香灯歲修之用。因北至与錢姓陸肆肆畝接壤、中有通、河兩岸船只出入往來、官溝為界、延至光緒八年、其田成熟一半、不料錢姓貪心不足、越界侵占、久告不休、蒙上憲斷作買売、本村買回、費銀肆佰余金。奈本村窮苦不堪、將田出典与各姓、至今未能取贖。近年寺内觀音文昌披髮三教香灯、举目蕭条、幸逢十方官紳広施鴻慈、大發慈仁、捐資功德、贖回此田、則香灯千古不絶、即功德姓名万世不朽矣。

功德姓名臚列於後

花翎特授雲南鎮辺庁昇用知府李応棠捐銀伍拾兩
特授雲南鎮雄州知州署新興州黃玉方捐銀壹佰兩
特授雲南府易門県知県郭顕球捐銀伍拾兩
花翎運使銜雲南即用知府総弁老鴉潭厘局黃彝捐銀伍拾兩
欽加同知銜賞戴花翎候選州正堂張從徳捐銀參拾兩

光緒二十九年二月二十八日下漁村土庶老幼同立石

下村の「以て永久に垂る」の碑(訳)

蓋し聞く本村は蒙古を原籍とし、元時旃元帥の滇南に任じ、曲陀関を鎮守するに随いし自り、河

西の東門外の土に流落して住す。本村寒苦なるが為、子弟の読書を供培するに方無く、嘉慶十八年に於いて海淤田壹佰伍拾畝を報じ、将来熟田の畝と成して義学を設立し、並びに香灯歳修の用と作さんとす。北は至りて錢姓の陸拾肆畝と壤を接し、中に通、河兩県の船の只出入往來する有りて、官溝もて界と為すに因り、延びて光緒八年に至り、其の田の成熟すること一半、料らずも錢姓貪心にして足らず、界を越えて侵占し、久しく告すれども休まず、上の買売と作すと憲断するを蒙り、本村買い回すに、銀肆佰余金を費す。本村の窮苦堪えざるを奈んせん、田を將て典に出して各姓に与うれども、今に至るも未だ取り贖うこと能わず。近年寺内の観音文昌披髮三教香灯、目を挙げて蕭条たり、幸いに十方の官紳の広く鴻慈を施し、大いに慈仁を発するに逢い、資を功德に捐し、此の田を贖い回せば、則ち香灯千古絶えず、即ち功德の姓名万世朽ちず。

功德の姓名後に臚列す

花翎特授雲南鎮辺庁陞用知府の李応棠銀伍拾兩を捐す

特授雲南鎮雄州知州署新興州の黃玉方銀壹佰兩を捐す

特授雲南府易門県知県の郭顯球銀伍拾兩を捐す

花翎運使銜雲南即用知府総弁老鴉潭厘局の黃彝銀伍拾兩を捐す

欽加同知銜賞戴花翎候選州正堂の張從徳銀參拾兩を捐す

光緒二十九年二月二十八日下漁村の土庶老幼同に石を立つ

滇は、雲南地方の別称。莅任は、着任。曲陀関は、通海の西北24kmにあり、河西地区に属す。元の至元二十年（1283）に臨安広西元江等処宣慰司都元帥府が設置された。嘉慶十八年は、1813年。海淤田は、水辺の干拓不十分の泥田。海は、杞麓湖を指す。畝は、面積の単位。清の一畝は、6.144a。熟田は、耕作に適するようになった田。義学は、義捐金により設立された学校。『清史稿』卷一百六志八十一選挙一に「義学、初由京師五城各立一所、後各省府、州、県多設立、教孤寒生童、

或苗、蛮、黎、瑶子弟秀異者（義学は、初め京師の五城各おの一所を立てし由り、後に各省府、州、県多く設立し、孤寒の生童、或いは苗、蛮、黎、瑶子弟の秀異なる者を教う」とある。香灯は、仏前に昼夜の別なく灯しておく油灯。歳修は、年々の修理費。北至と錢姓陸拾肆畝接壤は、北側が錢という姓が所有する六十四畝の土地と境界になっていたということ。錢姓は、恐らく漢族であろう。現在の興蒙の地理から考えると、村に近い北側に漢族の所有地があるということは、当時は、モンゴル族と漢族の所有地がかなり入り組んでいたようである。土地所有に関する紛争が起きる余地があったといえよう。通河兩県は、通海と河西。官溝は、政府管理の運河。光緒八年は、1882年。憲断は、官の裁き。観音は、観音菩薩。文昌は、道教の神で文昌帝君。中国の民間信仰のレベルでは、仏教と道教の区別はなく、寺院でも文昌帝君が祀られている。披髮は、さんばら髪で、何か奇怪な姿をした神の別名と思われる。藍面赤髮の魁星であろうか。三教は、儒仏道の三教聖像であろう。官紳は、官僚と地方名士。下漁村は、下村。かつては上漁村、中漁村、下漁村の三漁村であった。実態に合わなくなって、漁の字が省かれるようになった。

花翎は、功勞官吏に与えられる孔雀等の羽で、官帽の後ろに付ける。特授は、皇帝の特旨による任用であることをいう。鎮辺庁は、鎮辺直隸庁で、現在の思茅地区瀾滄拉 族自治県。地方の行政区画単位に府、庁、州、県がある。陞用知府は、昇進して知府（府の長官）となった経歴であることを示す。庁の長官は、同知である。鎮辺庁が直轄の庁であるので、格上の知府を称することができたのであろう。鎮雄州は、鎮雄直隸州で、現在の昭通地区鎮雄県。新興州は、現在の玉溪地区玉溪県。鎮雄州知州署新興州は、鎮雄州の知事で新興州の代理知事でもあることを示す。易門県は、現在の玉溪地区易門県。易門県知事は、易門県の知事。運使銜は、塩運使の資格があること。雲南即用知府は、雲南府の知事にポスト待ちせずに任用されたことをいう。総弁は、統括責任者。老鴉潭は、現在の昭通地区大関県の老鴉灘のことと思われる、四川と雲南との交通の要所。厘局は、厘金局で、商品通過税を徴収する役所。欽加同知銜は、

府の副知事としての格式を皇帝から与えられていることをいう。候選州正堂は、ポスト待ちの州の知事候補であることをいう。碑文には十方の官紳とあるが、寄付をしたのは、この五人だけである。全く無関係の人が寄付をするとも思えないので、この村と何らかの関係が形成されていたに違いないのだが、具体的には不明である。『明清進士題名碑録索引』（1980年、上海古籍出版社）によれば、光緒二十四年第三甲一百九十三名の中に郭顕球の名が見える。江西新建の人。他の李応棠、黄玉方、黄彝、張從徳の名は見えず、官僚ではあるが、科挙の出身ではない。郭顕球の例から考えて、彼らも村と直接の類縁があるというわけではなさそうである。強いて想像すれば、「下漁村の士庶老幼共に石を立つ」とあるので、この村にも士が存在していたことがわかる。当然リーダー的な役割を果たしていたものと思われる。碑文を撰したのも村の士の一人であろう。碑文の中の文昌帝君は、科挙受験の神様である。また披髪が魁星であるとすれば、これも科挙受験の神様である。庶のための神様ではなく、士のための神様といえよう。士は、官僚予備群の知識人層であるから、五人のような地方官僚と個人的な関係を結ぶ機会がある。個人的な関係に依存した寄付であるからこそ、特に顕彰する必要も出てきたのではあるまいか。いずれにせよ、モンゴル族の小さな共同体が外部の政治的世界との交渉役を必要とすることは、過去も現在も同じである。現在は、それを幹部が担い、過去は、それを士が担ったのである。士も幹部も外部の政治的世界のイデオロギー学習者であるが、碑文に「本村は蒙古を原籍とす」とあるように、また最近になって新蒙を興蒙に改名したり、モンゴル族の祭りであるナーダムを開催するようになったことに見られるように、共同体内部に対しては民族意識を喚起する、境界域に立つ者の二面性を運命とする。現在の幹部たちを観察していても、そのイデオロギーは、都会の漢族より遙かに硬直的であるが、外部の政治的世界との交渉者であることが、むしろ彼らの民族意識を深かめているのではないかと思われるフシがあった。

この碑文についての『雲南省蒙古族歴史簡述（初稿）』の解釈は、おおよそ次のようなものである。

下村のモンゴル族人民は、子弟の教育のために、湖を干拓して百五十畝の田を造成することを決定し、河西県に届け出た。70年近くの苦勞の末、耕作地になりかけたところ、北隣の錢という姓の地主に占拠されてしまい、県に訴えたが、地主階級の利益を代弁する県の官僚は、モンゴル族人民が開墾した土地を錢姓の地主の所有と決定し、モンゴル人民に四百余両で買い戻せと命令した。下村の人民は買い戻す方法もなかった。付近の地主階級の政治的代表者たちは、菩薩の顔をして現れ、土地を買い戻すための義援金を寄付し、「以垂永久」という功德の碑を手に入れたのである。その実、功德の美名の下に寄付された義援金は、もともと多くの労働人民の血と涙の結晶であり、買い戻された土地から得られる収入も封建的な寺や廟のために費やされ、モンゴル族人民の子弟教育の願いは泡となって消えたのである。

共同体意識の強い集団を背景とした碑文も階級史観で裁断すれば、かくなるのかも知れないが、そもそも村落の寺や廟は、信仰共同体をベースとする都市の寺や廟と異なり、地縁共同体をベースにしなければ、存立そのものが難しい。そして、共同体を活性化する祭りは、寺や廟を中心とせざるを得ないのである。魯班像は、中村の寺（大仏殿）に併設されている魯班廟から出発するのである。現在でも魯班像を外部の人間に簡単に見せないのも共同体意識が作用しているからであろう。その意味で、寺や廟は、共同体にとって、封建的であろうがなかろうが、常に必須の機能を果たす場なのである。極端に言えば、信仰は、外皮に過ぎない。寺の山門に中村老年人協会の看板が懸かっているけれども、支障はないのである。本質的な役割は、共同体意識を活性化する場であり得るか否かにある。義学は、外部の政治的世界との交渉をこなせる人材の育成のためには必要な施設であるが、寺や廟は、共同体全体にとって必要な施設なのである。資金が不足すれば、後者が優先されるであろう。前者は、この時に碑文を撰する能力のある士が村に存在していたように、ただちに不可欠とはいえないものなのである。事の結末は、むしろ下村の士が共同体の成員としての意識を庶と共有していたことを物語っている。

3 明清故趙氏門中歴代先遠昭穆考妣神主之墓

(原文)

吾家系蒙古籍、自蒙古入滇、居河西下漁村住、世遠年久矣。門戸凋殘、飢饉有星之感、人煙寥落、憂勞若鴻雁之悲。遐思明清兩朝所故之人丁、不計其數、茲略存神主六十八個、祭室如懸磬、俱無供主之処、將吾主東倒西斜、每觸目而傷心。今於道光庚子年、合族公議、同立石碑、并葬神主。至於考妣生卒日期、難以盡錄。今墳內神主六十八個、使後世子孫、春秋二祭、勿敢疏忽、當必事死如事生也。

明清故趙氏門中歴代先遠昭穆考妣神主之墓

(訳)

吾が家は蒙古の籍に系なり、蒙古自り滇に入り、河西の下漁村に居りて住み、世遠く年久し。門戸凋殘し、飢饉に星留の感有り、人煙寥落し、憂勞すること鴻雁の悲しむが若し。遐かに明清兩朝に故となる所の人丁を思えば、其の数を計らず、茲に神主六十八個を存せんことを略すも、室の磬を懸けるが如きを奈んせん、俱に供主の処無し、吾が主の東に倒れ西に斜めなるを將て、毎に目に触れて心を傷ましむ。今道光庚子の年に於て、合族公議し、同に石碑を立て、並びに神主を葬る。考妣の生卒日期に至りては、以て尽く録し難し。今墳内の神主六十八個、後世の子孫をして、春秋二祭せ使む、敢て疏忽にする勿れ、當に必ず死に事えること生に事えるが如くすべし。

星留は、見慣れない語で、星流の書き誤りではないかと思われる。星流だとすれば、たちまちに過ぎ去ることで、命のはかなさをいうのであろう。故は、死ぬ。人丁は、成年の人。幼兒子供は、含まれない。神主は、位牌。略は、計画する。室如懸磬は、家の中に何も無い様子で、貧乏であること。供主之処は、先祖を祀る場所。吾主は、先祖の位牌。道光庚子年は、1840年（道光二十年）。考妣は、死んだ父母、石碑を立てる時には、その生卒の日にちがわからなくなっていたようである。

この石碑も鳳山の南斜面にある。三聖廟より上部で、山神廟（天子廟とも表記されていた）のある頂上にかけて墓地となっている。漢族の墓地と異なるところはない。村を見下ろす場所であり、子孫たちを監視しているようでもある。趙氏の墓は、唯一碑文のある墓で、案内されたのもモンゴル族を先祖とすることが明記されているからであらう。しかし、趙氏が「合族公議」して石碑を立てたことは、漢族の宗族制の影響が如実に現れている。

各家庭でも祖先の位牌を祠っている。我々が訪問した家では、二階正面の部屋に祖先の位牌が安置してあった。寺や廟における仏教と道教の混交のさま、祖先崇拜など、興蒙の宗教文化は、漢族と何ら変わりはない。家屋構造も三房一照壁で、漢族と全く同じである。たまたま近くの村の回族が家を新築中で内に入れてもらったが、照壁が無かった。当然であろう。照壁は、邪鬼を避けるためのものなのである。多神教的世界観を否定するムスリムの回族には不要である。興蒙のモンゴル族には、ムスリムである回族のような世界観を柱とする民族的アイデンティティーの主張は見られない。世界観を完全に漢族に同化させながら、独自の言語や周辺少数民族に影響を受けたと思われるドレス・コード⁹⁾など、耳に聞こえ、目に見える形で、民族的アイデンティティーを具象的に表現する。しかし、建築業を主要な収入源としていく過程で、建築業を神話的に民族化したことは、言語やドレス・コードに加えて、共同体の維持再生を大きく支えてきたものと思われる。通海は、雲南の小日本だそうである。近辺の、特に回族の村には、経済的に成功したと思しき新築の家が目立った。近代化と共に、興蒙でも職業の多様化が進むことが予想される。新しい知恵が、いずれ、必要とされるであろう。

謝辞

本稿は、京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画1994第10次隊（中国雲南省南部）の一員としておこなった調査に基づいている。文部省科学研究費・海外学術調査による助成を受けた（研究代表者：堀了平、課題番号05041112）。調査の実施にあたってご協力いただいた関係各位に深く感謝し

ます。

参考文献

- (1)『雲南省蒙古族歴史簡述（初稿）』（1977年3月 雲南歴史研究所）
- (2)馬書田『華夏諸神』（1990年2月 北京燕山出版社）
- (3)冷立等編『中国神仙大全』（1990年2月 遼寧人民出版社）
- (4)李喬『中国行業神崇拜』（1990年6月 中国華僑出版公司）
- (5)楊知勇等編『雲南少数民族生活誌』（1992年12月 雲南民族出版社）
- (6)畢堅『雲南少数民族節日活動趣聞録』（1992年12月 香港中国和世界出版公司）
- (7)玉溪地区民族事務委員会編『玉溪地区民族志』（1992年10月 雲南民族出版社）
- (8)張劉等編『秘境節祭—雲南少数民族年節祭会』（1991年12月 雲南人民出版社）
- (9)松沢哲郎等「少数民族の文化的アイデンティティ—：中国雲南省の蒙古族の調査から」（1994年12月「ヒマラヤ学誌」5号）